

♪ぎんぎんぎらぎら 夕日が沈む ぎんぎんぎらぎら 日が沈む～♪

夏の夜空に輝く(金)星を見上げ、虫の声を聞きながら夕涼みをしていた幼いころが懐かしい。スポーツや勝負事の世界では、弱者が強者を倒して大番狂わせが演じられると、勝った弱者のチーム(選手)が「金星を獲った」と称賛される。中でも大相撲界では、この「金星」に強いこだわりがあり、「金星」は長く相撲史に残り、昇給の材料ともなり、場所ごとにいくつかの価値ある「金星」が生まれる。そこには一定の条件があった。大相撲では、平幕力士が横綱に「初」挑戦し勝利を得た時にのみ、勝ち名乗りをあげた平幕力士が「金星」を獲得したとされていた。誰もが新鮮で爽やかな気持ちになり、そこには弱者を褒めたたえ、よくぞやったとの激励の気持ちが表れている。それは平幕力士にとっても大きな励みにも、名誉にもなっている。

ところが、近年相撲協会は、いつのまにか2度目以降の戦でも平幕力士が横綱を倒せば、勝った平幕が「金星」を得たと認めているようだ。相撲界が「金星」の大安売りを始め、「金星」が激増したのである。結果的に、それが「金星」の価値の下落を招くことになった。「初挑戦」という条件を除いた

ことによって、当然のことながら「金星」が増え、「金星」の新鮮さが失われ、有難さも薄れ、ついに同じ横綱からいくつもの「金星」を稼ぐベテラン平幕力士まで現れるようになった。本来の新鮮な「金星」が「銀星」へ格落ちしてしまったのだ。ついに先の秋場所では「金星」に値しない首を傾げるような疑似「金星」が続出した。

中でも不審に思ったのは、平幕高安関が横綱照ノ富士を破ったケースである。NHK アナも興奮気味に「高安、勝った! 金星!」と、まるで高安が鬼の首でも取ったかのように大げさな表現をしていた。しかし、考えてみるに、高安は今でこそ平幕力士の地位に甘んじているが、かつては大関として活躍し、大関高安対平幕照ノ富士という今とは逆の立場の対戦もあった。対戦成績も、高安が13勝12敗で上回っている。これで平幕高安が横綱照ノ富士を破ったからと言って「金星!」「金星!」と大騒ぎしたところで、本来の「金星」の意に適っているだろうか。かつてのように「金星」とは、若く未熟な平幕力士が初対面で番付最高位の横綱を破る、予想もしなかった大番狂わせが起きた時にこそ、ぴったりの言葉ではないだろうか。

エッセイスト 近藤 節夫